共苦の射程を拡張する

――ショーペンハウアーの共苦概念に関する観念論的考察――

太田　匡洋

はじめに

本稿の目的は、ショーペンハウアーの「共苦」概念を観念論的な観点から再構成する方途を呈示することによって、動物を典型事例とした人間以外の存在者に対する道徳的配慮の可能性をめぐるショーペンハウアーの言説の射程を検討することである。

ショーペンハウアーの倫理学は、他者の苦悩を自らの苦悩として看取する「共苦（Mitleid）」という現象に定位することによって、人間の道徳的行為を説明する立場である。このような「共苦」という現象に定位したショーペンハウアー倫理学は、カントに象徴される人間理性を原理とした倫理学のオルタナティブとして、おもに動物倫理の文脈などで注目を集めている。

しかし、ショーペンハウアー自身の言説を紐解くならば、たとえば動物の苦悩について、ショーペンハウアーは比較的冷淡な意見を有していたことが伺いしれる。具体的には、生理学的・解剖学的な知見に基づくことで、動物は感受性が人間より低いことを根拠として、人間が動物を使役することを正当化する議論が展開されている。

他方でショーペンハウアーは、共苦という現象を、そのような生理学的・解剖学的な事実に回収されないような、「意識の事実」として語っている。特に『道徳の基礎について』においては、共苦という現象を、我々の意識における事実として認め、この共苦という現象を根拠とすることによって、それを基礎づける形而上学的な概念装置としての「物自体としての意志」へと遡及するという議論構築を行っている。

上記のようなショーペンハウアーの二つの言説は、一見すると矛盾するように思われる。この矛盾が先鋭化するのが「泣く」という現象をめぐるショーペンハウアーの言説と、我々の日常的な経験のあいだに存するギャップである。ショーペンハウアーによれば、「泣く」という現象は、自己自身に対する共苦であるとされる。そして、他者の苦悩を契機として泣く場合には、たんにその他者の苦悩に共苦しているだけではなく、その他者の苦悩を契機として、「人類一般の運命」を感得することによって、再帰的に自己自身への共苦を行っていると指摘する。その限りにおいてショーペンハウアーの記述は、「泣く」という現象の向けられる対象を、事実上人間だけに限定するものとなっているといえる。しかし、この

ようなショーペンハウアーの指摘は、我々がペットなどの死に際しても涙を流すという事実によって、簡単に論駁されるように思われる。このように、倫理学における人間の特権性をめぐるショーペンハウアーの言説は、内在的な矛盾や現実との不一致をはらんだものとなっている。

それでは、このような矛盾ないし不一致を、どのように解釈するべきなのであろうか。本稿では、この矛盾・不一致を、ショーペンハウアー哲学の二面性として解釈することによって、それぞれの側面に固有の射程を見定めることを目指す。具体的には、高橋陽一郎によって指摘されている、ショーペンハウアー哲学に認められるべき「観念論的・主観的考察」と「実在論的・客観的考察」の二面性が、共苦をめぐる文脈においても成立しており、ショーペンハウアーが生理学的・解剖学的な観点から行う苦悩に関する言及や、人間を特権視した共苦論は、「実在論的・客観的考察」へと回収されることを指摘したうえで、それに回収されないような、「観念論的・主観的考察」に定位して議論する余地が残されていることを指摘する。そして、ショーペンハウアーの形而上学における、実在性の基礎づけをめぐる言説を参照することによって、観念論的側面に定位した共苦の対象の拡張を試みる。最終的に、この矛盾した二側面に定位することによって、初めて非人間に対する共苦の実態を語れるようになることを指摘する。

1. ショーペンハウアーにおける動物倫理の言説

1.1. 近年における動物倫理に対する着目

先述のように、ショーペンハウアーの倫理学は、他者の苦悩を自らの苦悩として看取する「共苦」という現象に定位することによって、人間の道徳的行為を説明する立場である。このような「共苦」という現象に定位したショーペンハウアー倫理学は、カントに象徴される人間理性を原理とした倫理学のオルタナティブとして、おもに動物倫理の文脈などで注目を集めている (上野山, 2011, 147 頁)。このように動物倫理に関するショーペンハウアーの言説は、ショーペンハウアー倫理学が人間以外の存在者に対しても射程を有することの典型事例として位置づけることが可能である。人間理性を原理に据える立場においては、カントの動物倫理に顕著に認められるように、人間以外の存在者を道徳的配慮の対象にする根拠が、間接的な仕方でしか、すなわち人間に対する道徳的配慮の補助になる限りにおいてしか認められえない。しかしショーペンハウアーの共苦の概念に基づくことによって、そのような間接的なかたちではなく、直接的に、動物などの人間以外の存在者を、道徳的配慮の対象に据えることが可能になると考えられているわけである。

1.2. ショーペンハウアーにおける動物の苦悩に関する記述

しかし、動物に関するショーペンハウアー自身の記述を参照するならば、ショーペンハウアーは動物に対する道徳的配慮に関して、比較的冷淡な態度を取っていたことが伺われる。この態度は 1818 年の主著『意志と表象としての世界』の第一版から一貫したものであり、この点についてショーペンハウアーは次のように指摘している。

> 動物の生命や諸力（例えば運搬力）に対する人間の権利は、次のことに基づいている。苦しみというものは意識の明瞭さが高まるにつれて、平均して高まっていくものなのであるから、動物が死とか労働によってこうむる苦痛は、人間が単なる労働によってこうむる苦痛ほどにまだ大きくは無いし、人間が獣肉を食べないですませたり、動物の力を借りないですませたりすることによってこうむるであろう苦痛ほどにもまだ大きくはない。それゆえに人間は自分の存在を肯定していくにあたり、動物の存在を否定するまでにいたることが許されている。これによって生きんとする意志は、全体としては、この逆の場合にくらべ苦痛を担うことが少ないのである。このことは同時に、人間が不正にはならないで動物の諸力を利用することが許されるその程度を規定するものであるが、[…] これに反し、昆虫は死んでも、人間がそれに刺されたときほど苦しみを覚えるものではない。――インド人はこの点が分かっていないのである[1]。(WI, 440, 邦訳, III, 154 頁)

実際、上野山自身も、「従来、ショーペンハウアーは動物の苦しみには言及しているが、結局動物よりも人間の苦しみを重視しており、動物の権利の積極的な支持者ではないという評価が多くなされてきた」(上野山, 2011, 139 頁) と指摘している。

ショーペンハウアーのこれらの言説は、生理学的・解剖学的な知見に基づいたものであり、もともと医学・生理学の学修からキャリアをスタートさせたショーペンハウアーのリアリズムを見て取ることが可能なものであると言えるであろう。

1.3. 意識の事実としての共苦とショーペンハウアーの動物論の矛盾

これに対して、『道徳の基礎について』をはじめとした著作においては、上記のような生理学的・解剖学的な類推に基づく「意識の明瞭さ」とは異なる観点から、「共苦」の説明がなされている。具体的には、「共苦」というものが、あくまでも我々の意識の事実として成立している現象であり、この事実のうちに、行為の道徳性の基準が認められている。この点について、ショーペンハウアーは次のように述べている。

［…］ある行為もしくはその中止の究極の動機がまさしく、そしてもっぱら、そのさいに受け身において関与するなんらかの他者の快・不快にある場合である。つまり、能動の側が行為もしくはその中止にさいして、ただ他者の快・不快のみを考え、その他者が害をこうむらないこと、もしくは他者が助けや援護や便宜を受けるということ以外のなにものをもけっして目的としない場合である。この目的のみが、行為もしくはその中止に道徳的価値の刻印を押すのである。(GM, 207, 邦訳 322 頁)

そして、「人間の行為の根本衝動」は、自分自身の快と他者の不快を別にすれば、この「共苦」のうちにすべて求められるとショーペンハウアーは指摘する。

一般に、人間の行為の根本衝動は、三種類しかない。およそ考えうるすべての動機は、つぎにあげる三種類の衝動に呼びおこされることによってしか生じえない。
a. 自分自身の快を欲するエゴイズム（これは、とどまるところを知らない）
b. 他者の不快を欲する悪意（極度の残忍さにいたる）
c. 他者の快を欲する共苦（高潔と宏量にいたる）
(GM, 210, 邦訳 325 頁)

そしてショーペンハウアーによれば、この共苦という現象は、「倫理の原現象」であるという。

たしかに、この現象は、驚嘆にあたいし、それどころか神秘的でさえある。それは、まことに倫理の偉大な神秘、倫理の原現象であり、形而上学的思弁のみが踏み越えることのできる境界石である。（GM, 209, 邦訳, 324 頁）

上記のような、意識の事実としての共苦の位置づけは、共苦の対象を人間に特権化しようとするショーペンハウアーの生理学的・解剖学的な議論と不整合をきたしているように思われる。

その典型が、ショーペンハウアーが「泣く」という現象に認めている射程の問題である(太田, 2022, 207 頁以下)。ショーペンハウアーによれば、「泣く」というのは「自己自身に対する共苦」であるとされる。

泣くことはしたがって自分自身に対する共苦であり、あるいは自分の出発点へと連れ戻された共苦であると言ってもよいかと思う。それゆえ泣くことは、人を愛し同情する能力によって、ならびに想像力によってもたらされるものなのである。(WI, 445, 邦訳, III, 159 頁)

そして、人間が他者の苦悩を契機として泣くのは、他者の苦悩を契機として「人類一般の運命」を認識する、すなわち人類一般に対して共苦することによって、再帰的に自己自身に共苦するからだとされる。

われわれは自分の苦しみによってではなしに他人の苦しみに動かされてなくことがあるが、この場合は次のようにして起こってくるのである。われわれはなまなましい想像力で苦しんでいる他人の立場に身を置いてみるか、あるいはその人の運命のうちに全人類の運命を、したがってなによりもまずわれわれ自身の運命を見て取っていて、要するにそういう遠い回り道をへて、結局はつねにもう一度われわれ自身のために泣くというわけなのだ。われわれは自分自身に対して共苦を覚えるというわけなのだ。［…］してみると彼の心を主としてとらえているのは、人類全体の運命に対する同情なのである。 (WI, 446, 邦訳, III, 161 頁)

このようにショーペンハウアーは、「泣く」という現象を記述するにあたっても、人間偏重的な態度を崩すことなく、共苦の対象をあくまでも人間に限定する議論を展開している。

もとよりショーペンハウアー倫理学の最終到達点は共苦ではなくて意志の否定である。そして、意志の否定は基本的には人間によってしか達成されえないというのがショーペンハウアーの見解である。そして、ここでの「泣く」という現象をめぐるショーペンハウアーの行論は、共苦と意志の否定を媒介する位置に置かれており、そのような事情から、「泣く」という現象の記述に際しても、あくまでも人間にフォーカスを当てざるを得なかった事情は、汲まれてしかるべきである。

しかし、そのような事情を脇に置いて考えるならば、ショーペンハウアーが「泣く」という現象に際して取っている人間偏重的な態度は、そのまま受け入れることができるものではない。なぜなら、われわれはペットが死んだ時も、同じように涙を流すことがある。また、同じように、愛着を抱いているロボットなどが壊れた場合にも、我々は恐らく涙を流すことになるであろう。

このような「泣く」という現象に関する我々の実態と、共苦の対象を人間に限定しようとするショーペンハウアーの共苦論は、いかにも矛盾しているように見える。

このようなショーペンハウアーの矛盾には、いかなる意義が認められるのであろうか。以下では高橋陽一郎によるショーペンハウアー解釈の道具立てを参照することによって、この矛盾に認められるべき意義を考察する。

2. ショーペンハウアーの共苦における二つの側面

2.1. ショーペンハウアー哲学における二側面性

高橋陽一郎は、ショーペンハウアーの「意志」概念の性格を考察するなかで、ショーペンハウアー哲学に認められるべき二側面性を指摘する。具体的には、ショーペンハウアー哲学の叙述は、「観念論的・主観的考察」と「実在論的・客観的考察」という二つの相対する要素から成り立っていると指摘している。

> ショーペンハウアーの思想には、[…] 実にさまざまな矛盾が指摘されてきた […]。そうした指摘が起こるのは、ショーペンハウアーの思想が、本来区別されるべき、しかし両立可能な二つの観点［観念論的・主観的観点と実在論的・客観的観点］に立って叙述されていることにももちろん原因はある。しかしそれだけでなく、むしろ後代のショーペンハウアー解釈者たちによってそうした区別がなされていないか、区別が不徹底であるか、あるいは区別が徹底して行われていても意志理解の根本が誤ったままであるか、そのいずれかの方にこそ原因があると言えるであろう。 (高橋, 2011, 23頁)

以上のように指摘した上で、高橋は「観念論的・主観的考察」と「実在論的・客観的考察」のそれぞれの性格について、次のように指摘している。

> まず「観念論的・主観的考察」の特徴（あるいは長所と短所）とは何か。それは、第一に、意識を与件として前提するということであり […]、第二に、自己の内部の道を通って、直接事物の本質（意志）に接近できるということである。では、この考察法の限界点とは何か。それは、鏡が自らを見ることができないように、意識そのものを考察対象とできないこと、この一点である。では「実在論的・客観的考察」の特徴とは何か。それは第一に、自然存在者を与件として前提するということであり、第二に、意識を客観的事物として考察対象にできるということである […]。一方限界とは、事

物の本質（意志）に、それにもっとも相応しい仕方では接近することができない、ということである［…］。 (高橋, 2011, 29 頁, 傍点は原文による)

高橋の指摘は、基本的にはショーペンハウアーの「意志」概念の解釈をめぐってなされているものであり、共苦に関するものではない。しかし以下において、高橋のこの区別が「共苦」をとりまく二面性に関しても妥当性を有していることを指摘する。

2.2. ショーペンハウアー哲学の二側面性の倫理学における現出

既に述べたように、動物の苦悩に関するショーペンハウアーの言説は、生理学的・解剖学的な知見に基づいたものであり、もともと医学・生理学の学修からキャリアをスタートさせたショーペンハウアーのリアリズムを見て取ることが可能なものである。このようなショーペンハウアーの観点を、高橋の道具立てによって再解釈するならば、ショーペンハウアーの動物に関する言説は、「共苦」を「実在論的・客観的考察」に立って解釈したものであるといえる。これに対して、「共苦」を意識の事実として説明する立場は、「観念論的・主観的考察」の立場に立ったものであると考えることが可能である。その意味では、高橋がショーペンハウアーの「意志」概念に見出した「矛盾」が、「共苦」においても成立していると考えることが可能である。

それでは、共苦に関する「観念論的・主観的考察」を徹底した場合、「共苦」の概念はどのような射程を有することになるであろうか。以下では、この観点からショーペンハウアーの「共苦」概念を再解釈する道を探る。

2.3. 共苦をめぐるショーペンハウアー形而上学の観念論的性格

本節では、共苦に関する「観念論的・主観的考察」を徹底した場合、「共苦」の概念はどのような射程を有することになるのかを検討する。もともと高橋の指摘する「観念論的・主観的考察」は、ショーペンハウアーにおける形而上学の成立を基礎づける局面で導入されるものである。したがって、「観念論的・主観的考察」を徹底するには、まずはショーペンハウアーにおける形而上学の成立の現場へと遡る必要がある。

もとよりショーペンハウアーは、倫理学の課題を、哲学一般の課題と結びつけて論じている。ショーペンハウアーによれば、倫理学の課題、ひいては哲学一般の課題は、我々に「感情」として与えられているものを、概念による抽象的な認識にもたらすことに尽きるという。

哲学は存在するものを解釈し説明すること以上にはなにもなし得ない。具体的に、ということは感情として、誰の内にも分かりやすく現れている世界の本質を、理性を用い明瞭に抽象的に認識させ、しかもこの作業をあらゆる考えられる限りの関係で、各観点から行うこと以上には、哲学はなにひとつなし得ない。(WI, 320, 邦訳 II, 238 頁以下)

それでは、「感情」を「理性を用い明瞭に抽象的に認識させ」るということは、どのような操作を意味するのであろうか。この点については、「形而上学」を主題的に扱った第二巻において述べられている。ここでショーペンハウアーは、ここで述べられる「感情」の対象を、「実在性」という言葉で総称する。そしてショーペンハウアーいわく、われわれはこの実在性を「感じ取って」いるという。

客観すなわち表象としての世界が、それとは別になおも、すなわちそれ自体として、何であるのかということに対する我々の問い全体が基づいているのは、根拠律ではなく、次のような事情である。すなわち、この世界はたんなる幻影のように我々の前を通り過ぎることなく、我々にとってある意義を有していること、そしてその意義を、我々の本質全体が要求し、我々すべてが感じ取っている、すなわち直接的に認識しているが、それを呼び表すことができないという事情である。それゆえ我々が問うのは、この表象の有する意義の抽象的な解釈であり、この意義に対する我々の関心の源泉にしたがって、それを問うのである。その結果として、我々は直観的な諸表象に実在性を付与することとなる。我々が知りたいのは、この実在性が何であり、いかなる意義を有するかなのである。 (Deussen, X, 28, 強調は原文による)

ここで「実在性」によって名指されている対象は、後の美学や倫理学で取り上げられる対象を含んだ、総論的な意味を担わされている。主著の第二巻および対応する講義録の記述は「自然の形而上学」と銘打たれているが、もとよりショーペンハウアーによれば、「自然の形而上学」という表現と「形而上学」という表現は、事実上同一のものであるという。別の観点から言えば、第二巻で「実在性」という概念によって総称されている主題は、美学や倫理学という「各論」に入るに先立って、「総論」として与えられているものであるといえる (太田, 2013, 61 頁以下)。

私の考察の第二部を、私は「形而上学」と称した。さらには、以下に続く二つの部を

区別するために、「自然の形而上学」と呼んでいる。しかし本来、ここには同語反復が存している。 (Deussen, X, 15)

以上のような「形而上学」の性質を踏まえた上で、注意すべきは、外的世界の実在性が、我々が現にそれを感じ取っているという事実によって、基礎づけられている点である。この「外的世界の実在性」が、美学や倫理学の対象を含めた形而上学全般の対象に対する総称である以上、このような問題設定は、そのまま倫理学の文脈にも妥当することになる。というのも、主著§53 で倫理学を論ずる際に哲学一般の役割へと遡源されていたことからも見て取れるように、上記の実在性の典型事例の一つとして挙げられるのが、ほかならぬ共苦だからである。

このようなショーペンハウアーの行論を倫理学の文脈に落とし込むと、次のような定式化が成立する。すなわち、「観念論的・主観的考察」を徹底化するならば、我々が共苦するに際しては、先立つ実在者が存在しているから、その実在者に対して共苦するわけではない。むしろ、我々が何らかの対象に共苦するという事実が現に存するからこそ、そのような対象に、道徳的な実在性が付与され、その実在性の内実が概念によって語られる、という構図になっているのである。

共苦に認められるべきこのような性質に関して、多田光宏は次のように述べている。

この物自体としての形而上学的な意志を要請することなしに、共苦という感情が可能であることを説明することはできないし、同一の形而上学的な意志に基づくことができるのでなければ、共苦という感情は可能ではない。逆の観点からいえば、共苦という感情がなければ、形而上学的な意志を要請する必要はどこにもない。それゆえに、形而上学的な意志は共苦の存在根拠であるが、共苦は形而上学的な意志の認識根拠であるということができる。[…] この物自体としての形而上学的な意志は、実体として前提されていたのではなく、経験によっては説明することができない共苦を説明するために要請されたということである。 (多田, 2007, 144 頁以下, 傍点は原文による)

このように、実在性の基礎づけをめぐるショーペンハウアーの議論は、「観念論的・主観的考察」に基づいており、それは共苦の文脈においては、「共苦を認識根拠とすることで、我々は対象の実在性を認識する」という構図に帰着することになる。この構図は、動物の生理学的・解剖学的な事実に基づいて、その意識の明晰さから苦悩の度合いを算定するような、「実在論的・客観的考察」とは異なる射程を、共苦という振る舞いに対して与えるも

のとなるであろう。このような共苦に関する解釈を、「共苦に関する観念論的考察」と呼ぶことにしよう。

2.4. 共苦の対象の拡張

先述の観点に立つならば、我々がペットに代表される動物が死んだ際にも「泣く」という振る舞いをしている以上、動物を典型事例とした人間以外の存在者に対しても、「共苦」の対象としてのステータス、すなわち道徳的配慮の対象としての位置づけが、人間と同様の権利を持って、付与されなければならないはずである。

ここでのショーペンハウアーの振る舞いは、おもに「共苦」という現象に関する概念工学の試みの残響であると見なせるとともに、ショーペンハウアーの成果を引き受けて、我々に対しても概念工学をするよう促すものとなっている。概念工学とは、近年のメタ哲学において自覚的に引き受けられるようになっている活動の一つであり、おもに概念に定位して「我々の表象手段を評価し、改良する試み」を指す。この点について、笠木雅史は次のように指摘している。

> 現在のメタ哲学において「概念工学」と呼ばれている活動の内実は多様であり、それらすべてを包括する定義は、一般的・抽象的なものにならざるをえない。カペランによる一般的定義では、概念工学とは、「我々の表象手段を評価し，改良する試み」[…]である」（笠木, 2020, 3 頁）

概念工学という概念そのものは近年になって登場したものであるが、概念工学に相当する試みそのものは、過去の哲学史においても場所を占めてきた。もとよりショーペンハウアーは、「意志」概念の拡張に定位した形而上学の樹立を企図しているが、ここでショーペンハウアーが試みている「意志」という概念の拡張は、「意志」という概念の射程に関する改良の提案であり、ここで試みられているのは、一種の概念工学である。これと同じ試みの可能性を、ショーペンハウアーは「共苦」のうちにも置き残している。一方では「実在論的・客観的考察」に定位することで、同時代の最新の知見に定位した生物学的な論拠に基づいたものとして「共苦」の射程を設定する反面、「観念論的・主観的考察」を遂行することによって、そのような共苦の射程を、ショーペンハウアーと同時代には想定できなかったような文化や社会、科学の変容に即して、さらに拡張する余地を残しているのである。

3. ショーペンハウアーの共苦論の射程

3.1. 「実在論的・客観的考察」の役割

以上では、「観念論的・主観的考察」に定位することで、「共苦」の射程を拡張する可能性をショーペンハウアーが置き残していることを確認した。それでは、なぜそもそもショーペンハウアーは、共苦を語るに際して、「実在論的・客観的考察」をも加えたのであろうか。ここにおいて、高橋陽一郎が「より高次の立脚点」と述べた視座が、共苦論においても生きることとなる。すなわち、「「観念論的・主観的考察」の不十分さを「実在論的・客観的考察」が補い、同時に後者の不十分さを前者が補うという仕方で初めて限なく世界全体が現れるとすれば、そのような認識の高次性、しかも世界を超出することなき内在的認識の高次性こそ「より高次の立脚点」であり、したがってそれは、それらの考察仕方とは別の第三の立場ではな［い］」(高橋, 2011, 34 頁)。

ショーペンハウアーの解釈の二面性は、一方では共苦の対象の拡張を可能としつつも、他方では、実在論に定位することで、いわば功利主義的な快楽計算を可能とするような自然秩序にも自覚的であることによって、共苦に関する観念論的考察が引き起こしかねない共苦の暴走を抑止するような謙抑性を有している。この点に「実在論的・客観的考察」の役割がある。われわれが遠くの戦争犠牲者よりも眼前の伴侶動物の福利を優先したいと考える時、それは「共苦」の感情という一点のみによって、無条件に是認されるのであろうか。このような問題に対して、ショーペンハウアーの「実在論的・客観的考察」は、我々の認識に対する修正を要求する。というのも、われわれが遠くの戦争犠牲者よりも眼前の伴侶動物の福利を優先したいと考える理由の一つは、共苦の源泉を感性的直観のうちにしかもたないわれわれ人間の有限性と無関係ではなく、直接的認識を根拠としてそのような有限性に自閉することを戒めるものとして、「実在論的・客観的考察」は位置づけられるからである。

3.2. 「観念論的・主観的考察」の役割

それでは、「観念論的・主観的考察」はいかなる位置づけを有するのであろうか。それが、「実在論的・客観的考察」の進展を促すとともに、我々を概念工学へと駆り立てるという役割である。「実在論的・客観的考察」は、仮にその時代の最先端の科学的知見を容れているとしても、悲観的帰納法にしたがえば、必然的に可謬的なものである。そのような可謬性を自覚させるのが、「実在論的・客観的考察」に回収されることなく道徳的視野の拡張をせまる「観念論的・主観的考察」である。たとえば、「痛み」という概念を、「実在論的・客観的」な視座から、特定の神経の興奮として理解するのは、通常よく取られる態度であ

るが、通常の倫理学がロボットなどにアプローチすることを困難にしている理由の一つでもある。これに対して、「観念論的・主観的考察」に基づいて、ロボットにも共苦するわれわれの意識の事実に基づくことで、たとえば「痛み」という概念を拡張して位置づけなおす可能性などが選択肢として登場することになる。

このように、共苦に関しても、この一見矛盾した二軸に定位することによって、我々は初めて共苦の暴走を戒めつつも、非人間に対する共苦の実態を語れるようになると思われる。

註

(1) ただし、ショーペンハウアーは次のようにも指摘している。「だがしかし、この程度を人は往々にして逸脱する。荷運び用の動物、ならびに猟犬の場合がそうである。動物愛護協会の活動がとくに目指しているのはこの点である。この権利はさらに、私の見解では生体解剖にまでは、ことに高等動物の生体解剖にまでは及ぶものではない」 (WI, 440, 邦訳 154 頁)。

文献

Arthur Schopenhauer （引用には以下の略号を用いる）

Werke: Sämtliche Werke, Hrsg. von Arthur Hübscher, 7 Bände, Wiesbaden: F.A. Brockhaus, 1972ff.

WI: *Die Welt als Wille und Vorstellung, Band 1*, in: Werke II.
（2004, 西尾幹二訳, 『意志と表象としての世界』I-III, 中央公論新社.

GM: *Über die Grundlage der Moral*, in: Werke IV.
（1973, 今村孝訳, 「道徳の基礎について」, 『ショーペンハウアー全集』第 9 巻, 白水社）

Deussen, I-XVI: *Sämtliche Werke, hrsg. von Paul Deussen, 16 Bände*, München: Piper Verlag, 1911ff.

上野山晃弘 (2011). 「ショーペンハウアーと動物倫理—共苦の倫理学の現代的意義—」, 『理想 特集 ショーペンハウアー哲学の最前線』, No.687, 139-148 頁.

太田匡洋 (2013). 「ショーペンハウアーにおける類比推論について —「実在性」はいかにして可能か—」, 『哲学論叢』, 第 40 号, 58-69 頁.

——— (2022). 『もう一つの 19 世紀ドイツ哲学史. ポストカントにおける哲学方法論の系譜』, 京都大学学術出版会.

笠木雅史 (2020). 「「哲学」の概念工学とはどのようなことか」, 『哲学の探求』 47 号, 2-26 頁.

佐藤啓介 (2017). 『死者と苦しみの宗教哲学——宗教哲学の現代的可能性』, 晃洋書房.

高橋陽一郎 (2011). 「ショーペンハウアーにおける矛盾の積極的意味—ショーペンハウアーを矛盾なく読むために、そして再び矛盾あるものとして読むために—」, 『理想 特集 ショーペンハウアー哲学の最前線』, No.687, 23-37 頁.

多田光宏 (2007). 「<同情＝共苦>の哲学」, 『ショーペンハウアー読本』, 法政大学出版局, 136-146 頁.

〔沼津工業高等専門学校　准教授〕